第５章　コンソーシアム・職域プロジェクト連携型講座の開発と実証

1.　コンソーシアム・職域プロジェクト連携型講座のねらい

連携型講座のねらい

1. **職域プロジェクトに共通する課題、職域プロジェクトだけではカバーしきれない領域、全国各地の食農人材育成プログラムに欠けている部分、を補完するためのプログラムの開発**
2. **農学部がない県における食農分野の中核人材養成に必要な教育手法や連携体制の仕組みの開発**
3. **地域性やニーズに合わせた新たな教育手法の開発**

今年度、コンソーシアムの新しい試みとして、職域プロジェクトと連携した実証講座の開発・実証に取り組んだ。コンソーシアムは職域プロジェクトの支援や評価が主な役割であり、講座の開発や運営は職域プロジェクトの役割である。コンソーシアムと職域プロジェクトで役割分担があるにも関わらず、あえてコンソーシアムが職域プロジェクトと連携して実証講座に取り組んだのは、以下の理由からである。

第１に、職域プロジェクトに共通する課題、職域プロジェクトだけではカバーしきれない領域、全国各地の食農人材育成プログラムに欠けている部分については、コンソーシアムが開発に関与する必要があると判断したためである。また、職域プロジェクトと連携して実証講座を企画・運営することで、より深く職域プロジェクトの取り組みを分析・評価することを狙ったためでもある。

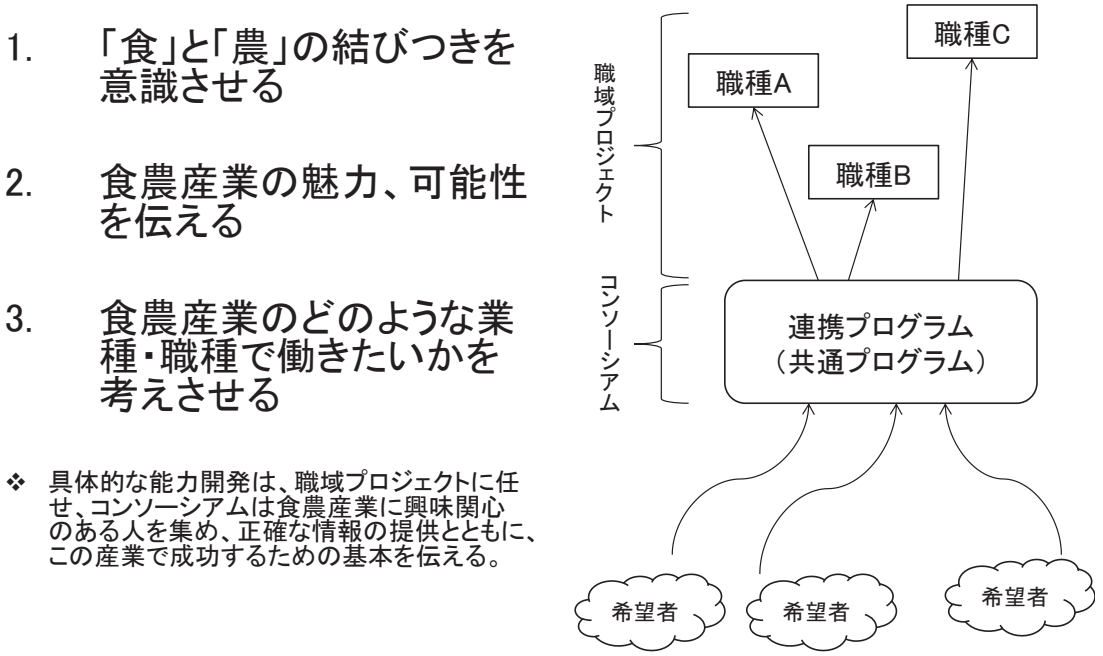
第 2 に、農学部がない地域における食農人材育成システムの開発の必要性である。群馬県は農業県であるが、農学部を持つ大学が存在しない。全国にもそのような地域が少なからずあるため、大学農学部を軸にした教育システムをスタンダードとして位置づけることはできない。また、地域によっては、専門的な教育機関が存在しない場所もある。そのような地域で人材育成を進める場合にも、今回の実証経験から得たノ

ウハウを応用できる可能性がある。

第３に、地域のニーズや個性に合わせた教育手法を開発する必要が生じたためである。これらの課題に対して、職域プロジェクトが単独で取り組むことも可能であるが、コンソーシアムが加わることによって、職域プロジェクトとは異なる視点から新しい教育手法を提案することができる。

以上のように、コンソーシアムは、通常科目を直接開講することはないが、新たなツール開発や食農分野全体に共通するプログラム開発などの実験的な取り組みについては、職域プロジェクトと連携して実証することで、様々なデータを蓄積することができ、解決策の考案に結びつけることが期待できる。

2.　実証講座「地域実践コース」のねらい



今回、食農コンソーシアムと中央農業グリーン専門学校が連携して実証講座に取り組んだ理由は、①「食と農を結びつけて考える力」を養成する、②食農産業の魅力、可能性を伝える、③食農産業のどのような業種・職種で働きたいかを考えさせる、という３点が、既存の食農人材育成プログラムのなかで十分に位置づけられていないため、コンソーシアムとしてこの課題に取り組む必要があった。

また、上記の理由以外にも、食農分野における中核的専門人材を育成するしくみを構築する上で、コンソーシアムがこれまで積上げてきた経験を実証的に明らかにする

必要があった（下図）。

連携プログラムの軸

- 考慮すべき内容
  1) 地域に溶け込む（コミュニケーション）
  2) 農業で生計を立てる（マネジメント）
  3) 農産物等を販売する（マーケティング）
  4) 地域課題を解決する（地域農業の理解）
- 教育手法
  1) 座学×実習×ワークショップ・グループワークをセットにする
  2) 受講生の人生設計、叶えたい夢・目標を意識させる
  3) 成功事例（食農ビジネスで成功した人）から学ばせる
  4) 食や農を実際に体験させる

第１に、食農分野の中核的専門人材が持つべき能力要件として、上図の４点を学習プログラムに取り入れることである。同時にこれは、食農分野全体に共通する学習プログラムの開発にも結びつく。現状では、各職域プロジェクトで共通して学ぶことができるエントリーレベルのプログラム、初学者に対しての学習の動機付けとなるようなプログラムがないため、食農分野の学習プログラムの標準化が不足している。

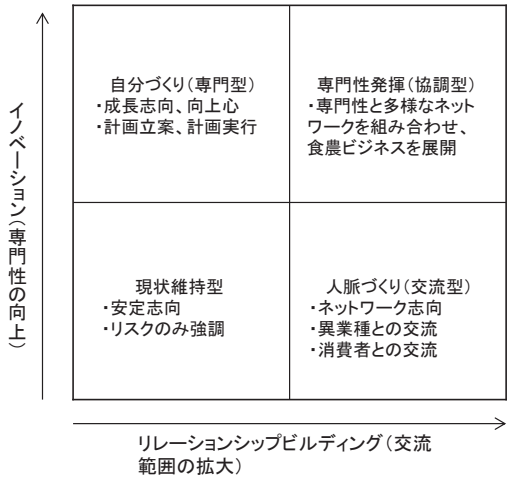
第２に、昨年度開発したユニット構成（座学→実習→ディスカッション）の効果の検証を行う必要があった。一般的なスクール形式（教師が前に立ち、一方的に受講生に知識を提供する手法）では、受講生の学習意欲や目標レベルによって、知識や技術の吸収率が異なるため、十分な教育効果を発揮しにくい。というのも、受講生が欲しいのは、自分自身の人生や職業にどのように役立つかが最も重要な関心事項であるため、そのようなセルフィッシュな欲求・願望を刺激することが、最も受講生の学習動機を強く刺激するきっかけになると考えたためである。そのため、受講生のライフプランや食農分野でどのような夢や目標を実現したいかといった個人的な部分を意識させる工夫を組み込んでプログラムを設計していく必要があると考えた。

3.　学習プログラムの設計理念

プログラムの設計理念

1）自己開発と人脈開発の意識付け
2）成功者・実践者から直接学ぶ
3）現地現場で体感しながら学ぶ
4）学びを実践につなげていく仕掛け
5）目的意識が同じ人たちとともに学び、仲間をつくる
6）消費者視点から「食」と「農」の結びつきを再構築させる

食農人材キャリアマップ



①　「食農人材キャリアマップ」

上述した様々なアイディアを実証講座に落とし込むにあたって、学習プログラム開発の根底にある設計理念を上図に示した。

今回の実証講座を開発するにあたっての設計理念は、食農人材キャリアマップに基づくものである。食農人材キャリアマップとは、食農分野の中核的専門人材に必要な人材像を、イノベーション（専門性の向上）とリレーションシップビルディング（交流範囲の拡大）の 2 軸で構成される 4 つの領域で表現したものである。

2 つの軸設定の根拠は、数多くの食農ビジネスの現地調査から得られた情報に基づいている。成長する人材は、向上心（やる気）があり、成長に直結する人脈と結びついていることが多い。このような現場の経験則を、育成すべき人材のフレームワークに応用したものが「食農人材キャリアマップ」である。

中核的専門人材として育成すべきは、図の右上の領域に位置する人材である。自らの専門性を異業種や消費者等の様々な人たちとの交流の中で発揮し、食農ビジネスを先導することができる人材像である。

その対極に位置しているのが、左隅の領域である。この領域の人材は、まだ専門性を十分身につけていない状態であり、かつ人脈も十分に開発されていない状態の人材である。食農産業への就業希望者と位置づけてもいいかもしれない。

また、左上や右下の領域に該当する人材は、専門性や人脈に強みを持っているものの、専門的な知識・技術が不足していたり、有益なネットワークを構築できていないため、中核的専門人材の一歩手前の段階に位置づける。

以上のように、食農分野の中核的専門人材を養成するためのフレームワークをあらかじめ開発しておくことは、今後このフレームワークに基づいて開発される各種学習プログラムの方向性に統一感を持たせるためにも有益であると考える。

② 学習プログラムに組み込む要素

上図「食農人材キャリアマップ」の左側に、中核的専門人材を育成するために必要な要素を6点提示した。

食農人材キャリアマップの右上の領域に学習者を進ませるためには、学習プログラムの中に、①自己開発と人脈開発の意識付け、②成功者・実践者から直接学ぶ、③現地現場で体感しながら学ぶ、④学びを実践につなげていく仕掛け、⑤目的意識が同じ人たちと学び、仲間を作る、⑥消費者視点から「食」と「農」の結びつきを再構築させる、ことが必要である。

これらの要素は、従来の学習プログラムには、十分に反映されていない場合が多い。知識や技術の習得は重要であるが、それらを習得させる前提として、これらの要素が学習者自身の基盤となるように意識して学習プログラムを設計する必要がある。また、指導側も、これらの諸点を意識して講義や技術指導をしていくことが求められる。教育段階で、学習者の成長をとどめてしまうようなことは避けなければならない。そのためにも、指導側も十分に成長意識を持って学習者の指導に取り組む必要がある。

これまで見てきたように、食農分野の中核的専門人材を養成するため、今回の実証講座では、既存の学習プログラムでは意識して組み込まれていなかった要素を十分に考慮し、極力これらの要素を学習プログラムの中に取り入れることを目指した。最も大切なことは、いかにして受講生の学習意欲をモチベートするかである。様々な形で受講者の欲求・願望を刺激する教育手法が、今まで最も欠けていた部分である。